中古語における引用句の文末用法

――終助詞的用法をめぐって――

辻　本　桜　介

1. 研究対象

次の（1）（2）では、引用句「…と」が、その係り先となるべき述語用言が省略されたような形で用いられている。

（1）「帯刀の友だちなむ、昨夜『物言はむ』とて来りしを、雨にとまりて、まだ帰らぬに、〈粥食せむ〉と思ふをなむ、なくて。土器少し賜へと。さてはひきぼしなどや残りたる。少し賜へ」と言へば、…（落窪・一・52）

（2）「あらずや。忍びてはよかるべく思すこともありけるがうれしきは、ひが耳か、聞こえさせんとぞ。うとうとしく思すべきにもあらぬを、心憂の御気色や」と恨みたまへば、…（源氏・宿木・5-427）

従来、こうした引用句は後に「言ふ」か「思ふ」を補って解釈すれば問題ないと見られてきたようであるが、「言ふ」と「思ふ」のどちらを補い、誰の言葉を引用するものと解すべきなのか、その判断基準は明らかにされていないし、また補うといっても、現代語訳の都合で補われるだけのものなのか、それとも統語論的に「言ふ」や「思ふ」といった用言の省略が起きていると認められるものなのか、定かでない。

本稿では、このように中古語において文末に現れる引用句の用法を記述し、後続する述語句の省略や言い残しとは考えにくい終助詞的な用例の状

況を整理する。

2. 省略・言い残しについて

具体的な分析に入る前に、“省略”と“言い残し”について確認しておきたい。これらは、述語句が消えたように見える表現においてしばしば問題となる概念であるから、あらかじめその定義を明確にしておく必要があろう。次の通り、省略の定義は拙稿（2014 : 43）に拠り、言い残しの定義は白川（2009 : 7-8）に拠ることとする。

（3） 省略…冗長さを避ける目的で、聞き手が文脈から補える範囲内において本来なら必要なはずの要素を言語化しないこと（拙稿 2014 : 43）

言い残し…言うべき後件を言わずに中途で終わっている文（白川 2009 : 7-8）

省略には次のようなものが該当する。

（4） 居酒屋へはどうやって<u>行った</u>？――自転車でφ。（拙稿 2014 : 45 の（12））

「自転車で」という格成分は、本来は係り先となる述語が必要であるが、言語化されていない。述語は、対話相手の発言の中に現れた要素（下線部）を拠り所として補完される。裏を返せば、前後文脈の助けが無くとも補完できるような要素は、省略された要素とは認められないことになる。

言い残しには次のようなものが該当する。

（5） 正樹「今日泊って行けよ」

慎平「そうしたいんだ<u>けど</u>ね（溜息をつく）」（白川 2009 : 8 の（18））

下線部は係り先となる主節が現れていないが、それがどのような内容であるかは（5）に示された文脈のみからは推測できない。白川（2009 : 8）は「文字通りの言いさしであり、内容的に未完結である」としている。

省略と言い残しは異質の現象のようではあるが、両者の厳密な区別は難しい。言い残しの場合、参照できる前後文脈が広ければ補完すべき語句を推測できる場合もあろう。この場合、省略と判定されることになる。

いずれにせよ、本稿の分析対象である文末の引用句に関して言えば、文脈次第で補うべき述語句（「言ふ」「思ふ」等）の種類に様々なものが想定される場合、それは省略か言い残しということになる。これに対し、前後文脈を参照せずとも一定の意味を持つ述語句を補って解釈できる場合、その述語句の表す意味は既に語彙的意味として引用句に定着していることになる。この場合、引用句は文末専用の文法形式、つまり終助詞的な用法と認められよう。以降、この観点を導入して用例を観察する。

3. 用例の分布状況

本稿末に示した中古語の主な和文資料から文末に現れた引用句を網羅的に抽出したところ、357 例得られた(1)。その分布状況を表 1 に示す。小田（2015 : 526-527）において「倒置以外で文末を「と」で終えることは、極めてまれである」とされる通り、引用句「…と」に他の助詞が何も付かない形で文が終わる用例は少ない。これに対し、係助詞の付いた用例は豊富に得られることが確認できる。

次に表 2 では、引用句が「…と言ふ」「…と思ふ」等の形で係り先となる述語と共起している場合の用例の分布状況を示した(2)。「…と」が他の

(1)　宇津保物語における会話文の引用方法はやや特殊で、次のように地の文の文末に引用句が現れたものが 16 例得られた。この 16 例は本稿では分析対象から除外してある。

（ⅰ）宮、「このいぬの餅参りし日、この君のあやしきことをのたまひしは、まことか」と聞こえ給へば、「知らずや。何ごとにかは」と。（宇津・国譲上・637）

(2)　ただし、次の用例と同様の用いられ方をしているものは集計していない。

（ⅰ）また、さるべき人々もゆるされじかしと、かねて胸いたくなん。（源氏・空蟬・1-126）

（ⅱ）よし心み給へ、「げにや、御心よりほかに見え奉りける」と。（寝覚 ↗

表 1　文末に現れた引用句の形

	と	とは	とも			とぞ		となむ	とや	とか			とこそ		とのみ					とだに		とばかりなむ	とまで		とな	とよ	合計
			とも	ともこそ	ともや	とぞ	とぞや			とか	とかや		とこそ	とこそは	とのみ	とのみこそ	とのみぞ	とのみなむ	とのみを	とだに	とだにも		とまで	とまでなむ			
竹取物語																									1		1
伊勢物語			1			1		2	2																		6
平中物語						1																					1
土佐日記						1		1	3																		5
落窪物語	7	1	1			1		3	5	2	1			2												2	25
蜻蛉日記						1		6	2	6								1				1				1	18
大和物語								5	1	2																	8
宇津保物語	10	3			1	1	20	3	57	13	17	3	9	5	1	3	1	6	1	2				1		1	158
枕草子									1		9	1														1	12
源氏物語	1		1				10		10	14			1					1							2	7	47
紫式部日記							1																				1
和泉式部日記	2						1		1	2														1			7
夜の寝覚							3		1																	2	6
浜松中納言物語	3						3			2																2	10
更級日記	2																										2
栄花物語	2						28		4	1	2		1					1					1	2			42
堤中納言物語	2						1			1		1									1					2	8
合計	29	4	3		1	1	72	3	89	44	42	6	11	7	1	3	2	8	1	2	1	1	1	4	3	18	357

助詞を伴わずに単独で現れる用例が突出して多く、係助詞等を伴う用例の使用量はそれに到底及ばないことが読み取れる。これはデータとして出さなくても容易に予想の付くことではあるが、表 1 がこれと全く異なる分布となっていることは重要である。文末に現れる引用句は、高い割合で係助詞を伴った形となるのであり、表 1 にあるような「…と言ふ」「…とも思

↘　・三・217）

（iii）父おとども、女子ものし給はねば、「忠こその母君に仕まつりし限りは、ほかに遣らじ」と、「わが世の限りは、眼閉ぢ給ひし所に候はせむ」。月に一度、故君の御ために八講し給ふ。（宇津・忠こそ・115）

（ｉ）は係り先となる述語句のうち格成分や連用修飾成分のみが現れているもので、（ii）は倒置と解されるものである。（iii）は引用句の直後でさらに会話文が引用されているが、引用助詞等が付いておらず、どのような構造であるか判断しがたい。この（iii）のような用例は宇津保物語において 10 例見られたが、他の作品からは得られていない。

表 2　係り先の述語句が文中に顕在している引用句の形

と	とは	とも			とぞ	となむ	とや		とか			とこそ		とのみ						とだに		とばかり	とまで		
		とも	ともぞ	ともや			とや	とやは	とか	とかは	とかや	とこそ	とこそは	とのみ	とのみこそ	とのみこそは	とのみぞ	とのみなむ	とのみも	とだに	とだにも		とまで	とまでぞ	とまでは
20532	630	848	2	9	585	553	139	18	96	9	9	270	53	373	7	2	16	8	1	72	3	101	23	7	1

ふ」等の形の述語部分において省略や言い残しが起きたものであるとは考えにくいのである。

表 2 において注意すべきは、それぞれの形式の用例数を比較した場合に、「と も」（848 例）>「と は」（630 例）>「と ぞ」（585 例）>「と な む」（553 例）>「とこそ」（270 例）>「とや」（139 例）>「とばかり」（101 例）>「とか」（96 例）>「とだに」（72 例）などとなっている点であろう。これは、表 1 における「となむ」（89 例）>「とぞ」（72 例）>「とや」（44 例）>「とか」（42 例）>「とこそ」（11 例）という順序とは全く異なっている。文末における使用頻度が高いものは、複合辞化している可能性が考慮される。

複合辞化しているとすれば、「…となむ」「…とぞ」等のそれぞれが、引用句「…と」と係助詞の合計では捉えきれない特殊な意味を帯びている可能性を考えなければならない。これを踏まえ、次節以降では「…となむ」「…とぞ」等を個別に観察することとする。

また、係助詞の付かない形で文末に現れる「…と」も、次のような用例が見られる点からすれば、係り先の述語句の省略や言い残しではない可能性を考えなければならない。

(6)　世の人々、「阿倍の大臣、火鼠の皮衣持ていまして、かぐや姫にすみたまふとな。ここにやいます」など問ふ。（竹取・42）

(7)　…「我をば人げなしと思ひ離れたるとな。ことわりなり。…」などのたまふついでに、…（源氏・紅梅・5-50）

これらの引用句に付くナは間投助詞用法を持たず、もっぱら述部文末に付

いて終助詞として働くもののようであるから、前接する引用句は連用修飾成分としての機能を持たず、述語的に用いられているのだと考えられることになる。これは、本来は副詞的成分であるはずの「…と」が統語的位置を変化させたことを示している。したがって係助詞等の付かない文末の「…と」も、どのような意味を担うようになっているかが問題となるだろう。

述部の省略や言い残しは、口頭語で起こりやすい現象であろうから、会話文中での用例が多く現れると予想される。そして、それが終助詞的な用法として定着している場合には、消息文や地の文にも一定の頻度で出現するようになっていると予想される。そこで、表3に地の文や会話文等の種別に基づいて用例の分布状況を示した(3)。

表3にあるように、文末に現れる引用句の形は予想通り会話文に集中する傾向にあるが、地の文にも一定量表れている。特に「とぞ」「となむ」

表3　本文種別と用例の分布状況

	と	とは	とも			とぞ		となむ	とや	とか		とこそ		とのみ					とだに		とばかりなむ	とまで		となむ	とよ	合計
			とも	ともこそ	ともや	とぞ	とぞや			とか	とかや	とこそ	とこそは	とのみ	とのみこそ	とのみぞ	とのみなむ	とのみを	とだに	とだにも		とまで	とまでぞ	とまでなむ			
会話文	19	3	2	1		9	3	39	21	16	1	7	7	1	2	1	3		1						3	16	155
消息文	1	1				9		27		13	2	3			1	1	4	1	1					2			66
心内文					1															1						2	4
地の文	7		1			49		22	14	7	3	1					1				1	1	2				109
和歌	2					5			9	6																	22
不明								1																			1
合計	29	4	3	1	1	72	3	89	44	42	6	11	7	1	3	2	8	1	2	1	1	1	4		3	18	357

(3)　表3で「不明」としたのは次の1例。

（ｉ）浅緑の紙に、宰相の君いとをかしげに書いたまへり。「いかにして過ぎにし方を過ぐしけむ暮らしわづらふ昨日今日かな　となむ。わたくしには、今日しも千歳の心地するに、暁にはとく」とあり。（枕・二八二・435）

この「となむ。わたくしには、［＝と、中宮様はおっしゃる。私信としては］」は消息の一部と見るべきか、地の文と見るべきか判断しがたい。

「とや」における地の文の用例数が目を引く(4)。次節で用例を分析するに際しては、こうした本文の種別にも注目することとする。

4. 用法記述

本節では、文末に現れた引用句の用法記述を行う。最初に係助詞等の助詞が付かない「…と」の用法を押さえ、続いて、用例の多いものから順に、係助詞の付いた形の「…となむ」「…とぞ」「…とや」「…とか」「…とこそ」を見ていくこととする。そのほかに、やや多く用例の得られた「…とよ」にも触れる。

4.1 他の助詞が後接しない「…と」の文末用法

引用句「…と」が係助詞等の他の助詞を後接させずに単独で文末に使われる用例は、29 例得られた。十分な量とは言い難いが、ある程度の傾向を掴むことは可能だろう。

会話文に現れるものが 19 例あり、そのうち 14 例は話し手の思考内容を引くものと捉えられ、「…と思っている」の意で解される。

(8) 「ここに胸やみたまふめり。物の積［＝胸や腹などの苦しくなる病気］かと。かいさぐり、薬などもまゐらせたまへ」とて、やがて預けて立ちぬれば、…（落窪・二・122）

(9) 宮、「あやしの人変はりや。かの君は、我だに、同じ所にあり馴らひて、所々なりしは、いとど恋しくて、常に泣かれし。［私は］えさはあらぬものから、『仲頼などがやうにあるは［＝出家するのは］、見苦しくこそは』と」。ぬし、「いとゆゆしきこと。

(4) 「となむ」「とぞ」などが物語の終わりに用いる形として定着していることはよく知られていよう。高橋（2014 : 313）はこうした形式を「話末形式句」と呼び、中世の説話において「「とぞ－伝承性の強調」、「となむ－現実性・臨場感の強調」、「とか・とかや－「笑い」の強調」」という相違があると主張している。これを踏まえてみても、それぞれの形式を個別に観察すべきであろう。

よし見給へ。必ず」など聞こえて、殿籠りぬ。（宇津・蔵開上・523）

（10）「いかなれば、かく［＝ふさぎこんで］はおはするぞ」となげき給ふに、「日本の中納言の琴弾きあそび給はんを見侍らばや。それにやいささか心ちまぎるると。そこはかとなく、おどろおどろしくくるしき事は侍らねど、ただうもれいたく心ちのむつかしきを」とこたへ給ふに、…（浜松・一・170）

残りの5例は、話し手が他者の言葉を引用するもので、「…と言っている」のような意と解される。全例を挙げれば次の通りであり、（11）は発話主体が引用句の前に明示され、（12）は疑問表現となっており、（13）は会話相手の言葉を問い返す形になっている。

（11）a. ［中納言が言うには］「左衛門督、『いとよし』と」。大将、「いで、さりとも、え、人知らじ」なんど物語り明かし給ひて、明けぬ。（宇津・楼上下・899）

b. 君、「…内裏にも、さぞのたまふなるや。内裏にも、『とまれ、さておはすと言へば、いと操なりや。内のこと知らねども』と」。大将、「さも聞こえねど、『さてのみは、いかでかは』とて。えこそ」。（宇津・蔵開下・603）

（12）a. 帯刀、「など今まではおりたまはぬぞ。世の中いかがあると。まだ出だしたてまつらずや。いみじくこそおぼつかなけれ。君の思し嘆くこといみじくなむ。『夜など、みそかに盗み出でたてまつりぬべしや。そのこと案内して来』とのたまはせつる」と言へば、…（落窪・二・133）

b. …この皇女、おほやけ使を召して、『…いみじくここありよくおぼゆ。このをのこ罪し、れうぜられば、われはいかであれと。これも前の世に、この国に跡をたるべき宿世こそありけめ。はやかへりておほやけに、このよしを奏せよ』と仰せられければ、…（更級・285）

（13）「かばかりの御志は今も昔もあらじ。〈類なし〉とは思ひきこえ

たまふや」と言へば、「〈少しよろしかんなり〉と。なほ飽かぬぞな」「〈少しよろしきは〉と。女はおほけなきこそ憎けれ。いみじくつらき御心のつづくとも、三十度ばかりは、今宵に許しきこえたまひてむ」など言へば、…（落窪・一・67）

つまり、他者の発言を引くものであることがこうした形で明示されない限りは、基本的に話し手本人の思考内容を引用するものとして固定的に用いられていると考えてよく、引用句の後に来る述語句の省略や言い残しではないものと見られる。

地の文・消息文・和歌の用例は分析に堪える量が得られなかった。地の文における用例はいくらか見られるが、次の通り、補うべき述語の種類は文脈に応じて様々なものがありうるようである。これは、省略ないし言い残しの用例と考えるべきではないだろうか。

（14）物のくさはひ［＝食べ物の材料］並びたれば、少将の君、「便なし」とのみ聞きしに、いと心にくく思す。女君も、〈いかなるならむ〉と［思う］。（落窪・一・69）

（15）…別当とおぼしき人出で来て、「…この御堂の東におはする丈六の仏は、そこの［＝あなたが前世で］造りたりしなり。箔をおしさして亡くなりにしぞ」と［言った］。（更級・337）

（16）東宮の御事まだともかくもなきに、世の人皆心々に思ひ定めたるもをかし。「大臣は皆知りておはすめる物を」と［世間では言われている］。（栄花・一・上-52）

4.2 「…となむ」の文末用法

次に、最も用例の多く得られた「…となむ」を分析する。表4では会話

表4　会話文・消息文における「…となむ」の解釈

	会話文	消息文	合計
話し手自身の思考内容を引用	26	21	47
他者の発話内容を引用	13	6	19

文と消息文における分布状況を示してある。

会話文と消息文の用例は、4.1 で見た「…と」と同様に、大部分は話し手（書き手）の思考内容を引用するものと解され、他者の言葉を引用するものは多くない。

（17）［右馬頭は］「殿の御許されは、道なくなりにたり。そのほどはるかにおぼえはべるを、［あなたの］御かへりみにて、いかで［姫君に逢いたい］となむ」とあれば、…。（蜻蛉・下・335）

（18）君は［老いた乳母を］いとあはれと思ほして、「…、なほ久しう対面せぬ時は心細くおぼゆるを、さらぬ別れはなくもがなとなん」などこまやかに語らひたまひて、…（源氏・夕顔・1-138）

（19）かかるほどに、紫の色紙に書きて、桜の花につけたる文、宮より。御使、蔵人。開けて見給へば、「『ただ今のほどは、いかが』となむ。かくては、えあるまじかりけり。何せむ、まかでさせて［＝どうしてあなたを退出させてしまったのだろう］。…」とあり。（宇津・国譲上・635）

（20）［近江の君が弘徽殿女御に］まづ御文奉りたまふ。葦垣のま近きほどにはさぶらひながら［＝あなたの近くに住んでいるのに］、今まで影ふむばかりのしるしもはべらぬは［＝その甲斐も無いのは］、勿来の関をや据ゑさせたまへらむとなん。知らねども、武蔵野と言へばかしこけれども。あなかしこや、あなかしこや。と点がちにて［＝「あなかしこや、ゝゝゝゝゝゝ」のように点が多く］、…（源氏・常夏・3-248）

（17）（18）は会話文の、（19）（20）は消息文の用例である。

他者の言葉を引く例も見られるが、2 つのパターンに分かれるようである。その 1 つは、次の（21）のように発話主体が明示されているもので、会話文に 5 例あった。

（21）a. おとど、「消息申したりしは、后の宮よりのたまふことなむありし。いかなることにか、『思ふ時には、さもありぬべき

ことなれど、世の乱れとなり、騒がしかりぬべきうちに、天下に、「まさる心あり」と、誰も誰も思ほえじ』となむ。『「いかなることぞ」と申さむ』とてなり。宮も、かしこを、『参らず』とのたまふめるに、『今宵なむ参らせむ』と思ふ。藤壺参り給ひなば、装束の薫物のやうなるべし。『鼬の間の鼠としも仕まつれ』とてなむ」とのたまへば、…（宇津・国譲中・707-708）

b. かかるほどに、大将、入り給ひて、「今のほどは。薬師どもに問ひ侍れば、『熱などにやおはすらむ』となむ。物問ふには、『霊気』とぞ。されば、真言院の律師のもとに、消息言ひ遣はしつ。参り来ば、護身せさせ奉らむ。三条より、『言ふべきこと侍り』とて、度々侍るを、ただ今の間にまかりて、いととくまうで来なむ」とてまかりぬ。（宇津・国譲中・707）

もう1つは、次の（22）のように発話内容が命令表現になっていて、思考内容とは解しがたいものである。こうした用例は会話文と消息文のそれぞれに4例ずつ見られた。

（22）a. さし向ひて対面したまひて、［衛門督が中納言に］「この家のかしこまりも聞こゆべくはべるを。ここに、また、人知れず嘆かるる人も侍るめるを。［女君が］『かかるついでに［あなたに］聞こえさせよ』となむ。この領じ造らせたまひけむ、一方には道理なれども、券のさまを見はべれば、…」とのたまへば、…（落窪・三・239）

b. …、大将、［女三の宮に］「いとゆゆしきことになむ。なでふ空心にてかは。『人々［＝妻妾］あまたものし給ふを、昔のごと、はた、え侍らじ。さしわきては［＝あなただけ特別扱いしては］、心よからぬことこそ侍れ。なほ、渡りおはしませ』となむ［父上は申しております］。かしこには、人も侍

らず、ただ仲忠らが母一人、目欠いたる嫗にて、宿守りには」と聞こえ給ふ。（宇津・蔵開中・564）

c. 先つ頃、このわたりにのたまふことありけるを、承らざりけるうちに、ここにものせられし人は、『身に添へて後見せさせむ』と思ひ給へしほどに、宮よりのたまはせければなむ、参りにけるを、『同じやうによろしからぬ人侍るめるを、いかがせむと聞こえよ』となむ」とて奉れ給へるを見給うて、宰相、涙をこぼして、とばかり物ものたまはず。（宇津・沖白波・456）

（22 a, b）は会話文の用例で、（22 c）は消息文の用例である。

それ以外にも、文脈から判断して話し手以外の人物の言葉を引くものと解すべき用例が、会話文に 4 例、消息文に 2 例見られた。

（23）a. 一日、頭の中将の、『世の人の言ふやうなむ、「帝のやむごとなくし給ふ物は、皆、そこに賜はりぬ。御娘の中に愛しくし給ふも、弄び物も、家までも、これと思したるは、皆なむ」と言ふ』とありしは、さも言ひつべきことにこそはありけれ」。大将、「『右大臣の御帯』となむ。これは、御前に候ひ侍りなむ。よき御帯侍らざめるを。仲忠は、故治部卿のぬしの、唐より持て渡り給へりける、まだ革もつけで石にて侍り、これにも劣るまじうは侍るを調ぜさせて、差し侍らむ」。（宇津・蔵開中・559）

b. 御返りは、中務の君、「『かく』など聞こえさせつれば、御宿直物奉らせ給ふ。夜寒は、『なよけも、まだ思し知らず』となむ。『「いぬ宮は、さおはします」と聞こえさせよ』となむ」とて奉れ給へば、…（宇津・蔵開中・536）

（23 a）は会話文の用例で、帝から下賜された帯を紹介するものであるから、帝かその側の者から聞いた内容を引くと解すのが自然だろう。（23 b）は消息文の用例で、直後の波下線部で「命令表現＋となむ」の形が現れて

いて、他者の発話内容であることが読み取れる。その直前に現れた「…となむ」も同様の用法と見ることになろう。ただ、前後文脈のみを頼りにして他者の発言の引用と判断するのには限界があるようにも思える。例えば（23 a）は話し手の推定内容を引くと解することも可能かもしれない。いずれにせよ、他者の言葉を引用すると解される用例は、さまざまな前後文脈の支えによってそうした解釈が生じるのであり、述語句の省略・言い残しと見るのが良いと考えられる。

以上に見た「…となむ」の用例の解釈は、基本的に「…と」と同様に見える。しかし、話し手自身の思考内容を引用するものは、用例数が多く消息文にも表れるという点において、「…と」とは異なっている。すなわち、文末専用の終助詞的な形式への変化が相当進んだものと考えられる。

地の文における「…となむ」に関しては、語り手にとっての伝聞情報を引用する（あるいはそういう体裁で物語の一節を締めくくる）ものであることはよく知られていよう(5)。

（24）さて、この池に墓せさせたまひてなむ、［帝は］かへらせおはしましけるとなむ。（大和・一五〇・384）

（25）光る君といふ名は、高麗人のめできこえてつけたてまつりけるとぞ言ひ伝へたるとなむ。（源氏・桐壺・1-50）

前後文脈に拠らずして伝聞情報を引くものであることが読み取れる点からすれば、これも無論のことながら、後続部分の述語句の省略や言い残しということにはならない。終助詞的な用法と見て問題ないだろう。

---

(5) 小田（2015 : 527）でも、「文末の「とぞ」「となむ」は、「…ということだ」という伝聞の意を表す」と紹介されている。ただし例外として次の 1 例が得られた。これは作者自身が書いた言葉を引用するものと解される。

（ｉ）消息は、この除目の徳にやと思ひたまへしかば、すなはちも聞こえさすべかりしを、『殿に』などのたまはせたることの、いとあやしうおぼつかなきを、尋ねはべりつるほどの、唐土ばかりになりにければなむ。されど、なほ心得はべらぬは、いと聞こえさせむかたなく」とてものしつ。端に、「『曹司に』とのたまはせたる武蔵は、『みだりに人を』とこそ聞こえさすめれ」となむ。さて後、おなじやうなることどもあり。（蜻蛉・下・328）

4.3 「…とぞ」の文末用法

次に用例が多く得られたのは「…とぞ」である。

用例の大部分を占める地の文での用法は、従来言われている通り、基本的に語り手にとっての伝聞情報を引用するものと解される(6)。

（26）［源氏は小君の］若くなつかしき御ありさまをうれしくめでたしと思ひたれば、つれなき人よりは［＝空蝉よりはその弟の小君を］なかなかあはれに思さるとぞ。（源氏・帚木・1-113）

（27）かくて、四條の皇太后宮悩ませ給ひて、祭など果てて後に、うせさせ給ひぬといふ。あかるる方なく、四條大納言扱ひきこえさせ給ふ。いとあはれなる世の中也。三條院、御心地猶おどろおどろしう在しますを、殿も上もいみじくおぼし歎かせ給ふとぞ。（栄花・十三・上-387）

問題となるのは会話文や消息文における用例である。会話文には9例あるが、引用される言葉に法則性は見出しがたい。

（28）おとどの、「いとあやしう。皆人のうらやみ聞こゆることの、かくのみものし給ふこそ。などか、殊物映えはなくは。今の人、［あなたの娘である藤壺が懐妊している若君を］『行く皆人の』とぞ」。（宇津・国譲上・675）

（29）…、大将、生まれ出づる代々のかはらけ［＝これから生まれてくる子供たちの祝いの酒］待つほどにまづ一度の稚児を見せなむ　とて、「また、御声しつる［＝赤子の泣き声がした］。佐野

---

(6) 次の用例は依拠テキスト通りならば地の文の扱いになるが、その場合は「…とお思いになる」の意で解され、例外となる。しかし、下線部から「大臣のおはせましかば」までを全て心内文と見る解釈を採れば、地の文における例外とはならない（ただし心内文での用例は他に得られていないので、この解釈が適切かどうかは疑わしい）。

（ｉ）…、怪しき事は、「みかどなどにはいかゞ」と見奉らせ給ふことぞ出で来にたる。されば五宮をぞ、さやうにおはしますべきにやとぞ。まだそれはいと稚うおはします。それにつけても、［帝は］「大臣のおはせましかば」とおぼしめす事多かるべし。（栄花・一・上-41）

のわたりの司にや［＝佐野の渡船場長の声だろうか］」とあれば、「『酒飲まざらむ人咎めむ』とぞ」と、［女房達が］口々にのたまふほどに、南の方に、…（宇津・蔵開下・580）

（30）…、立ち返り、「あが君や、寝覚めとか。『もの思ふときは［眠れるものではない］』とぞ。おろかに。荻風は吹かば寝も寝で今よりぞおどろかすかと聞くべかりける」（和泉・42）

（31）…殿は、ましていとあはただしき気色ながら、「さりとも、これに御心なぐさめ給ひてんな。いかが」とのたまふを、「さらなる事は、のちにさはとぞ」［「言うまでもないことは、後でそれはと…」］とこたへてぞ、…（寝覚・四・286）

（28）は、世間の噂の内容を引用するものと解される。（29）は泣く乳児に「祝いの酒を飲まないあなたを咎めよう」という意図を仮託したものと解される。（30）は、一般論を引用するものと解される。（31）は後に自身が話すつもりの言葉を引用するものと解される。このように引用される言葉のあり方が様々であるため、「…とぞ」の後に補うべき述語句も一定のものとはならない。どのような言葉が引用されているのかは、文脈に応じて適切な解釈を与えるしかないのである。こうした用例は、後続する述語句の省略か言い残しと考えるべきであろう。

一方、消息文の用例も9例見出されたが、8例は書き手の思考内容を引用するものと解される(7)。

（32）いとあはれに悲しきこと［＝あなたのお父上の死去］は、『聞きしすなはち［お慰めしよう］』と思ひしを、『忌むなど、人の言ふ日、過ごさむ』とてなむ。いかに。『ほど経るままに、心細

(7)　残りの1例は次のもので、文通相手の言葉を引用している。

（ｉ）［皆それぞれ］御返り言どもあり。中の君は、「近くても、同じおぼつかなさなれば、御文は。さて、［以前のあなたの手紙に］『手づから』とぞ［＝「鮎を自分でとったとのこと」］。さればこそ、年ごろは、海の原よそになりにし魚鳥は雲出づる原を誰か開けけむ『取り散らすな』とあるは、一人言よく」とあり。（宇津・国譲中・719）

く』とぞ。『[しかし私が居るのだから] 何か、さしも』とぞ。（宇津・国譲上・648）

（33）[朱雀院から] 紫の上にも、御消息ことにあり。「幼き人の [＝女三の宮が]、心地なきさまにて移ろひものすらんを、罪なく思しゆるして、後見たまへ。尋ねたまふべきゆゑ [＝女三の宮と紫の上が従姉妹の関係にあること] もやあらむとぞ。…」とあり。（源氏・若菜上・4-75）

手紙のやり取りにおいてのみ使用された形であろうか。「…と思う」という訳が固定的に当てはまる点から考えて、終助詞的な用法と見るのが良いと思われる。

4.4 「…とや」の文末用法

「…とや」は引用句「…と」に疑問を示す係助詞の「や」が付いたものか、いわゆる詠嘆を示す終助詞の「や」が付いたものかが一応問題となるが(8)、小田（2015 : 527）が「文末の「とや」は、「…と」で表される内容を確かめる意（「…というのか」の意）、また特に物語の最後の文の文末に用いて不確かな伝聞であることを表す」とするように、疑問を示す係助詞の「や」が構成要素になっていると見てよい(9)。それは、以下に示す用例の状況から確認できる。

地の文の用例から先に見ると、全て、語り手が物語を締めくくるに当たって他から伝え聞いた不確かな情報であるかのような体裁を取ったものと解すことが可能である。

（34）代宮の思しよるめりし筋は、いと似げなきことに思ひ離れて、

---

(8) 桜井（1979 : 71）は「「とや」の「や」は疑問ではなく、感動の意である」とするが、これといった根拠は示していない。

(9) 中村（2014 : 118）は、新古今和歌集における和歌の「…とや」の用例を引き、「「とや」は、下に「言ふ」を補って解する連語助詞で、〈というのか〉ということである」とする。「言ふ」を補うという操作が可能かどうかは不明だが、意味の解釈自体は問題ないだろう。

おほかたの御後見は、我ならではまた誰かはと思すとや。（源氏・総角・5-341）

（35）この州浜を見つけて、「あやしく」「誰がしたるぞ、誰がしたるぞ」と言へば、「さるべき人こそなけれ。思ひえつ。この、昨日の仏のしたまへるなめり」「あはれにおはしけるかな」と、喜び騒ぐさまの、いとものぐるほしければ、いとをかしくて見居たまへりとや。（堤中・454）

これはよく知られた形であろう(10)。一方、会話文・和歌の用例は必ずしも伝聞情報の不確かさを表明するものとは解されない。

（36）ある人、あざらかなる物［＝新鮮なもの（鮮魚）］持て来たり。米して返り事す。男ども、ひそかにいふなり。「『飯粒して、もつ［＝ムツ（魚名）］釣る』とや」。かうやうのこと、ところどころにあり。（土佐・二月八日・50）

（37）あこぎ、〈とりわきて、などしも物をかくいみじく思して、かかるは、いかなるべきにか〉と思ひて、心細く悲し。［あこぎが］「御焼石あてさせたまはむとや」と聞こゆれば、［姫君は］「よかなり」とのたまへば、…（落窪・二・124）

（38）つれづれといとど心のわびしきにけふはとはずて暮してむとや（大和・一六五・400）

（39）絶え間のみ世にはあやふき宇治橋を朽ちせぬものとなほたのめとや（源氏・浮舟・6-146）

いずれも、側に居る者や文通相手の意向を問うものとなっており、命令表現や意志表現を引用するものが多い。この解釈は和歌の用例 9 例の全てにあてはまり、会話文の用例では 21 例中 15 例にあてはまる。

会話文における残りの 6 例は、地の文での用法と共通しており、伝え聞

(10) 例えば（34）の「とや」は、新編日本古典文学全集において「語り手の伝聞の体裁で言いさし、物語はひとまず決着した」と注されている。

いた話を不確かな情報として引用するものと解される[11]。

(40)「誰も誰も、皆、さにこそは。太政大臣の君、はた、大声を放ちて、夜昼、[藤壺を] 拝み呪ひ、泣きののしり給ふなり。『まさなかめれども [＝東宮妃としては外聞が悪いが]、聞き入れ給はず』とや」など、局々、言ひ騒ぎ給ふ。(宇津・蔵開上・526)

(41)「…かしこにはべりける下童の、ただこのごろ、宰相が里に出でまうできて、[浮舟の入水が] たしかなるやうにこそ言ひはべりけれ。かくあやしうて失せたまへること、人に聞かせじ、おどろおどろしくおぞきやうなりとて、いみじく隠しけることどもとや。さて [宇治の者たちは薫にに真相を] くはしくは聞かせたてまつらぬにやありけん」と聞こゆれば、…(源氏・蜻蛉・6-258)

以上のように、「…とや」には誰かの意向の内容を推測して確かめようとする用法と、伝え聞いた情報を不確かなものとして示す用法の 2 種類を認めることができる。

誰かの意向の内容を推測して確かめようとする用法は、会話文と和歌のみに見られる。地の文に見られないのは、読者からの回答を待つものではないためであろうが、消息文に見られないことの理由は不明である。伝え聞いた情報を不確かなものとして示す用法は、誰かに答えを求めようとするものではないようである(独話的な性格を持つと言える)。それゆえ、語り手が地の文において物語に区切りを付ける時に用いられたり、会話文中で時折現れたりすることはあっても、誰かに言葉を伝達するための手段である和歌や手紙においては用いられないのだと考えられる。

4.5 「…とか」の文末用法

一定量の用例が得られた形としては「…とか」も挙げることができる。

---

(11) 聞き手に問いかける働きは無いようであり、日本語記述文法研究会(2003)における疑問文の分類では「疑いの疑問文」に当たると考えられる。

「…とか」は、若干の例外を除けば[12]、話し手（語り手・書き手）が伝え聞いた情報を不確かなものとして示す用法に特化した形式と言える。

（42）…、餅ををかしうしたれば、少将、〈誰かくをかしうしたらむ。かくて［私を］待ちけり〉と思ふも、されてをかしければ、「餅にこそあめれ。食ふやう［＝食べ方］ありとか。いかがする」とのたまへば、…（落窪・一・65）

（43）…、［中納言が］「限りなくおぼつかなう思ひあまりて、常よりもわりなき細道をそぼちつち、御迎へにまいり来つるを、これより深くもと、物憂げなる御気色に侍るとか。これより深くたづね入る心ざしもこそ［私にはある］」と、いみじうにほひやかに、ほほゑみ給へるはづかしさに、［姫君は］汗になりて、聞え

---

⑫　次のように、疑問詞を含む引用句に付いて疑問文を形成するものが5例得られた。

（ⅰ）…その人だにえ聞きつけで、「何とか、何とか」と、耳をかたぶけ来るに、…（枕・二五七・387）

（ⅱ）…［琴を］弾くにはあらで、緒などを手まさぐりにして、「これが名よ、いかにとか」と聞えさするに、「ただいとはかなく、名もなし」とのたまはせたるは、なほいとめでたしとこそおぼえしか。（枕・八九・176）

「何とか言ふ」「いかにとか言ふ」のような疑問文の述語が省略されたものかと思われる。5例の全てが枕草子のものであった。

他に例外としたのは次の3例。（ⅲ）の詠み手は、「ささら浪」が岸に打ち寄せる理由を推し量って擬人的に示している。（ⅳ）の話し手は、手紙に対する返事を書く者が居ないのを、自身が返事を書くよう求められている状況と解している。いずれも、「…とや」では珍しくない使われ方である。（ⅴ）の解釈は難しい。新編日本古典文学全集の頭注では「思ふためとか」に引歌があるかとされる。

（ⅲ）ささら浪まもなく岸を洗ふめりなぎさ清くは君とまれとか（大和・七二・417）

（ⅳ）［あて宮から女一の宮への手紙を勝手に見て］弾正の宮、「『この御返りは［私に］聞こえさせよ』とか。さらば、いらへ聞こえむ」と、いらへ給ふ人のなきに、空答へをし給ひつつ、「さらば」と聞こえ給へば、…（宇津・国譲中・719）

（ⅴ）［手紙を見て］北の方、「あな言よや」と、「『思ふため』とか」とてさし出で給へれば、押し巻きて［中の君に］奉れ給ふ。（宇津・国譲中・717）

ん方もおぼされず。（浜松・四・357）

（44）見るにことなる事なきものの、文字に書きてことごとしきもの覆盆子。鴨跖草。水茨。蜘蛛。胡桃。文章博士。得業の生。皇太后宮権大夫。楊梅。いたどりはまいて、虎の杖と書きたるとか。（枕・一四八・274）

（45）逢坂は人越えやすき関なれば鳥鳴かぬにもあけて待つとか（枕・一三〇・245）

（42）（43）は会話文の用例、（44）は地の文の用例、（45）は和歌の用例である。

近い意味を持つ「…とや」と比較すると、地の文での用法に関しては特に相違点は特に見出せない。和歌の用例に関しては、「…とや」は読み手が受け手の意向を推し量って示すものであるのに対し、「…とか」は伝え聞いた情報を不確かなものとして示すものとなっている。そして、消息文での用例は、「…とや」には見られず、「…とか」には一定量（13 例）が得られるという明確な相違点がある。この相違が生じる理由を考えるに当たって、会話文での用例に着目してみたい。

会話文おける「…とや」の用例のうち、伝え聞いた情報を不確かなものとして示す用法のものは、聞き手が引用内容の言葉に覚えがあるか否かに関係なく使われるようである。

（46）かくて、中納言、内に這ひ入りて、いぬ宮掻き抱きて、「いぬをば、宮は、いかがのたまひつる。多くの御目に、恥づかしくこそ」。宮、「『見せざりけり』などこそ」。「『醜し』とやありつらむ」。「『親どもにはまさりぬべし』とや」。君、「仲忠・宮とあるは、さもや見じ。さては、けしうはあるまじきものななり」。（宇津・蔵開上・522）

（47）大宮、「いさや。いとあやしきことをぞ、人言ひつるや。まことにやあらむ、『おとどを、あるやむごとなき所に取り籠めらるべし』とや。それこそ、いと恐ろしきたばかりなれ」。北の方、

「いづこに、いかが聞こし召しつるぞや」。（宇津・国譲下・755）

これらの「…とや」は、「…といっていたかな」のような訳が当たる。（46）は、対話相手からの質問（波下線部）に対する返答となっているので、対話相手も知らない情報を差し出すものと見るべきであろう。（47）も、対話相手が「…とや」で示された情報の出所について質問している（波下線部）点に注目すると、対話相手が知らない可能性のある情報を差し出したものと見られる。用例数が少ないので確実なことは言えないが、「…とや」はおそらくこうした使われ方に限られるのではないか。

これに対し、「…とか」は対話相手も知らない情報を示す（48）のような用例もあるが、（49）のように、対話相手にとって身に覚えがあるはずの情報が示される場合もある。

（48）「めでたきや。［四の君は］誰をか取りたまふ」とのたまへば、「左大将殿の左近の少将とか。かたちはいと清げにおはするうちに、『ただ今なり出でたまひなむ』と人々誉む。…」と言へば…（落窪・位置・89）

（49）久しうありて、［朱雀院から］「年ごろ、『かかる住まひの、かくせまほしかりつることも、見まほしきこともせむ』とこそ思ひしか。などか［あなたは］参られざりつらむ」と、「一の宮も、久しう見ねば、迎へにものせしかど、『［あなたが］とどめられにき』とか」とのたまへば、大将、「いとほしう、苦し」と思ひて、物も奏し給はず。（宇津・国譲下・778）

以上の観察を踏まえて消息文における「…とか」の用例（13 例）を観察すると、いずれも、引用内容の言葉が発せられた事実を手紙の受け手が知っているという前提で用いられているように読める。

（50）［章明親王が兼家に手紙で］また、のたまへり。「のどけからじとか。あめのした騒ぐころしも大水に誰もこひぢに濡れざらめやは」（蜻蛉・上・123）

（51）また、右大将殿より、［あて宮へ］今朝の御返り聞こえ給へり、

「…、今まで御前に候ひて、いと苦しうてなむ［＝疲れていて伺うこともできませんで］。『弟子に』とか。［私にはもともと］若宮に侍り参るべき心ざし侍るうちに、かくのたまはせたれば、『いかで、家司・雑役にも』となむ。…」と聞こえ給へり。（宇津・国譲上・657）

（50）の「のどけからじ」は、返歌の相手である兼家の歌にある「のどけからじを」を引用するものである。（51）の「弟子に」は、文通相手であるあて宮の手紙に「この人々は御弟子にしたまひて（＝私の息子たちを弟子にして書などをお教えください）」とあったのを引用するものである。これらは、確実に存在したと言えるような言葉を、不確かな伝聞情報であるかのように言い表す朧化表現と見てよいだろう。

さて、消息文において「…とや」の用例は得られず、「…とか」の用例は得られるという分布状況については、以上を踏まえればある程度の説明は付くと思われる。まず、「…とか」によって読み手の知識・記憶を引き合いに出す言い回しが消息文に現れるのは不自然ではないだろう。これに対し、不確かな伝聞情報を示す「…とや」は、相手がその情報の真偽を知っているかどうかも不明の状況で用いるわけだから、読み手への情報伝達を目的とする消息文においては使いにくいものであろう。相手の意向内容を確かめる「…とや」が消息文に現れないことの理由については保留したい。

4.6 「…とこそ」の文末用法

「…とこそ」の用例は多くないが、会話文（7 例）と消息文（3 例）に集中しており、地の文（1 例）では少ないことから、対人表現としての性格を持つようである[13]。会話文と消息文の用例は、基本的に話し手（書き

⒀ 対人表現かどうか判断に迷うものは次の 2 例。

（ｉ）…、君、白き紙に、「憂きことのまたしら雪の下消えてふれどとまらぬ世の中はなぞ　『憂からぬは』とこそ。何か。ながらふ、思ひ給へら↗

手）の思考内容を引用するものと解されるので、係助詞等の付かない「…と」の文末用法と似た性質を持つと考えられる。

（52）いにしへの例などを聞きはべるにつけても、心におどろかれ、思ふより違ふふしありて、世を厭ふついでになるとか、それはなほわるきこととこそ。（源氏・幻・4-534）

（53）「承りぬ。まかで侍りては、すなはち、『めづらし人［＝いぬ宮］をも、まづ［見たい］』とこそ。ここに、これかれものし給へりけるに、聞こえさせ、承るとてなむ［挨拶が遅れてしまいました］。…」と聞こえ給ふ。（宇津・国譲上・640）

（52）は会話文の用例、（53）は消息文の用例である。いずれも「と（私は）思う」の意で解せられよう。

4.7 「…とよ」

「…とよ」については、終助詞的に働いて詠嘆を示すものであるとの見方が従来からある(14)。それで大きな問題は無いとは思われるが、どのような語句に後接するものであるかを記述することも必要であろう。

18 例のうち 16 例は会話文に現れることから、口頭語としての性質が強いものと見られる。心内文に 2 例(15)現れている点を重視すれば、聞き手

↘ れず」とて、…（宇津・蔵開中・541）

（ⅱ）女御殿、一品宮など歎かせ給ふさま理也。いひやるべき方なし。宮づかさ・さるべき親族など、時失ひたる山賤にて、いかにとこそ。内にもあはれにいみじくおぼしめさる。うち続きあさましき年なり。（栄花・二十・下-539）

（ⅰ）の「憂からぬは」は諺か古歌の一部かと思われ、文意を解せない。（ⅱ）は地の文の用例だが、「どうしたものかと思う」のような意味で捉え、語り手の思考が現れたものと見ることは可能かもしれない。

(14) 小久保（1965 : 18-19）・北条（1966 : 341）・桜井（1979 : 80）・加藤（1998 : 117）など。北条（1966 : 527）は九州方言の終助詞であるトやタイなどへ変容するものとも説いている。

(15) 心内文に現れた 2 例は次の通り。

（ⅰ）「はや返りごとせよ」とてあれば、「をだまきは、かく思ひ知ることもかたきとよと思ひつるを。御前にも、いとせきあへぬまでなむ、思 ↗

に働きかけるものではないようである。従って、次のように疑問表現を承ける用例が半数以上（12 例）を占めるが、話し手が疑問を心中に抱いていることを表明するにすぎず、聞き手に対する質問の形をとるものではないと考えられる。

（54）…「ただ今、人の言ひつること聞こえむ。ただあからさまに出でたまへ」と聞こえさすれば、「何事ぞとよ。かしがましや」とて遣戸を押しあけてさし出でたれば、…（落窪・一・38）

（55）五月ばかり、月もなういと暗きに、「女房や候ひたまふ」と、声々して言へば、「出でて見よ。例ならず言ふは誰ぞとよ」と仰せらるれば、「こは、誰そ。いとおどろおどろしうきはやかなるは」と言ふ。（枕・一三一・247）

（56）妻戸押し開けて、「まことは、この空見たまへ、いかでかこれを知らず顔にては明かさんとよ。艶なる人まねにてはあらで、いとど明かしがたくなりゆく、夜な夜なの寝ざめには、この世かの世までなむ思ひやられてあはれなる」など、言ひ紛らはしてぞ出でたまふ。（源氏・宿木・5-418）

前接要素が疑問表現に偏ることは注意されるが、その理由は定かでない。疑問表現以外の用例も次の通り見られ、やはり話し手の思考内容を引用するものと解して問題ない。

（57）…「この籠は、金をつくりて、色どりたる籠なりけり。松もいとよう似て作りたる枝ぞとよ」と笑みて言ひつづくれば、宮も笑ひたまひて、…（源氏・浮舟・6-110）

↘ しためるを、見たてまつるも、ただおしはかりたまへ。思ひ出づるときぞ悲しき奥山の木の下露のいとどしげきに」となむ言ふめる。（蜻蛉・中・243）

（ⅱ）…［宰相中将は大納言の様子を］うちまもるに、「いみじく心ぐるしかりけるありさまに［＝中の君の傍に婿として］並べたらましかば。などて、ひき違へしあやにくさぞとよ」と見ゆるも心憂く、口をしくて、とみに物もいひ出でられぬに、…（寝覚・一・113）

(58)［大将が言うには］「あいなの御言や。よろづのことよりも、かの琴［＝弥行から伝授された琴］弾かざらむをば、何にかせむ。いで、まろ、いかで見奉らむ。さらずとも、いぬ宮と等しく教へ奉らむ」。［中納言が言うには］「な弄じ給うそ［からかわないで下さい］」。［大将が言うには］「［嘘ならば］雷神にも打ち殺され奉らむ。まことぞとよ」。（宇津・楼上下・897）

発話者の思考内容を引用する点は係助詞等の付かない「…と」の用法と同様であるが、疑問表現を引用するものに偏る点は、複合辞として独自の働きを担うものとなっている可能性を示している。

5. 分析結果の整理

4節では、文末に現れる引用句について、文脈次第で補うべき述語句の種類が様々に変わる場合は述語句の省略ないし言い残しであると判断し、文脈に拠らず一定の意味特徴を読み取れる用例が一定数ある場合には終助詞的な用法になっているものと考え、その用法を記述した。

表5はその結果をまとめたものである。複雑な様相を呈しており、一つひとつの形式が独自の働きを担っている状況が分かる。それぞれ、個別に終助詞的な用法を獲得したようであるが、基本的に「…とぞ思ふ」「…となむ言ふ」等における述語部分の省略ないし言い残しが習慣化して生じたものと思われる[16]。

6. おわりに

本稿では、筆者の行っている引用助詞の研究の一環として、係り先となる述語用言が省略されたように見える引用句を扱った。概ね、事実の記述

---

⑯ 「…とよ」は終助詞ヨが付くものであるから、述語の省略・言い残しに直接由来するものではないだろう。

表 5　終助詞的な用法と解される各種の引用句とその特徴

形式	引用される言葉の特徴	会話文	地の文	消息文	和歌
…と	話し手の思考内容	◎	—	—	—
…となむ	話し手（書き手）の思考内容	◎	—	◎	—
	伝聞情報	—	◎	—	—
…とぞ	書き手の思考内容	—	—	○	—
	伝聞情報	—	◎	—	—
…とや	推測される他者の意向内容	◎	—	—	○
	不確かな伝聞情報 ※聞き手（読み手）がその情報の真偽を知っているという前提は無い	○	◎	—	—
…とか	不確かな伝聞情報 ※聞き手（読み手）がその情報の真偽を知っていることを前提とした用い方が可能	○	○	◎	○
…とこそ	話し手（書き手）の思考内容	○	—	○	—
…とよ	話し手の思考内容（疑問表現の引用に偏る）	◎	—	—	—

◎…10 例以上　○…3～9 例　—…2 例以下

は済んだものと考えるが、それぞれの形式の用法の違いがどのように生じているかについては十分に突き詰めた考察ができなかったように思う。今後の課題とするとともに、本稿の内容について諸賢のご批正を乞いたい。

依拠テキスト（用例の引用に際し、句読点・括弧の付け方、漢字の字体、送り仮名の付け方を一部変更し、踊り字はその指し示す文字に置き換えた。また、筆者による解釈や補足を［　］に示した。）

竹取物語・伊勢物語・平中物語・土佐日記・落窪物語・蜻蛉日記・大和物語・枕草子・源氏物語・紫式部日記・和泉式部日記・更級日記・堤中納言物語……新編日本古典文学全集／宇津保物語……室城秀之（1995）『うつほ物語　全』おうふう／夜の寝覚・浜松中納言物語・栄花物語……日本古典文学大系

※用例検索には次のデータベースを利用した。

・国文学研究資料館『日本古典文学大系本文データベース』
https : //base3.nijl.ac.jp/

・国立国語研究所『日本語歴史コーパス』バージョン 2015.3
https : /ccd.ninjal.ac.jp/chj/

引用参考文献

小田勝（2015）『実例詳解　古典文法総覧』和泉書院
加藤浩司（1998）『キ・ケリの研究』和泉書院
小久保崇明（1965）「大鏡の語法「人とおぼえずとよ」小考」『語文』21　pp.15-21（日本大学国文学会）
桜井光昭（1979）「古代語の終助詞の分類－文の認定のために－」『学術研究』28　pp.65-81（早稲田大学教育学部）
白川博之（2009）『「言いさし文」の研究』くろしお出版
高橋敬一（2014）「宇治拾遺物語の話末形式句」『国語国文学研究』49　pp.303-313（熊本大学文学部国語国文学会）
辻本桜介（2014）「現代語のトと中古語のトテに関する引用述語の省略という分析について」『日本語学論集』10　pp.36-69（東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室）
中村幸弘（2014）『和歌構文論考』新典社
日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法 4』くろしお出版
北条忠雄（1966）『上代東国方言の研究』日本学術振興会

［付記］本稿は、令和 3 年度 JSPS 科研費（課題番号：19K13210）による研究成果の一部である。

（つじもと　おうすけ・関西学院大学文学部助教）